

テヌート

低炭素化の波到来で農業への炭酸ガス利用ニーズ拡大

農業ベンチャーのテヌート（藤原慶太社長）では、低炭素化推進の動きが活発化する中、炭酸ガス濃度を含む様々な要素を管理できる農業用環境統合制御システムの引き合いが急増している。

農業ハウスや植物工場では、農作物の光合成を促進することで成長を加速させたり、収量増加を図るため炭酸ガスを与える「炭酸ガス施用」を行うケースが増えている。テヌートは本用途向けにCO₂局所施用コントローラー『プレス』、その他、炭酸ガス濃度、温度、湿度をはじめ液肥中のpHやLEDライト、ハウスの換気窓の開閉等、農作物の生育環境を左右する各種要素を監視・管理できる環境統合制御盤シリーズ『コンダクター』を展開、全国各地に納入実績を持つ。

供給方法を推奨してきた。葉の周辺のみにはガスを流す「局所施用方式」により環境負荷低減とコスト削減の両方を実現できるとして、令和2年度民間部門農林水産研究開発功労者表彰で「農林水産技術会議会長賞（民間企業部門）」を受賞している。

昨今はSDGs推進の機運もあつて農業界でも環境意識が高まっているが、政府の「2050年にCO₂排出実質ゼロ」宣言が決定打となり、同社に対する問い合わせが急増しているという。藤原社長は「従来燃焼式の炭酸ガス発生機を使用していたが液炭に転換したいという依頼が散見される。さらにはバイオマス発電を手掛ける事業者等、様々な企業から「排ガス中の炭酸ガスを農業分野で再利用できないか」との相談も多く受けるようになった。排ガス由来の炭酸ガスは大量であり、需要規模に見合うのかといった課題はあるが、受け皿として農業は有望だと考えている。すでに実現に向け動き出している案件もある」と話す。

加えて、廃プラスチック削減の流れに呼応し、業界初となる全面木製の農業ハウスを開発した。屋根部分と側面は木製ブラインドで構成され、



実証設備に設置した木製ブラインド

ブラインドに設置した太陽光パネルで蓄電もできる仕組みだ。藤原社長は「環境意識が向上する今、当社の取り組みはかなり追い風を受けていると感じる。これに甘んじることなく新たな技術・事業開発に挑み、常に業界の先駆者でありたい」と決意を語った。

豊田合成

ボールウェーブに1億円出資

豊田合成（小山亨社長）は微量水分計やガススクロを手掛ける開発型企業ボールウェーブへ出資した。出資時期は20年11月、出資額は1億円。

ボールウェーブは東北大で発見された物理現象である弾性表面波を用いて、ガスに含まれる様々な物質をナノレベ

ルで瞬時に検知できる「ボールSAWセンサー」の製品化を進めている。一方、豊田合成は車の内外装部品の開発・製造で培った高度な表面処理技術を有している。

両社は今後、これらの技術や知見を融合させ、ボールSAWセンサーの更なる性能向上を図る。また将来的には豊田合成の深紫外LED技術との連携を視野に、新型コロナウイルスも含めた、空気中ウイルス検知センサーの実用化を目指すことにしている。

RITE

会場とWeb配信で「革新的環境シンポジウム2020」開催

公益財団法人地球環境産業技術研究機構（RITE。茅陽一理事長）は20年12月9日、東京都千代田区内幸町のイイノホールカンファレンスセンターで「革新的環境シンポジウム2020」を開催、会場

聴講116名（申し込み218名）、Web配信の聴講660名（同785名）、計776名が参加した。参加者は通常の3倍となったという。

来賓として挨拶した佐藤啓（経済産業大臣政務官は、先の国会で栄養偉総理が所信表明

演説で、2050年カーボンニュートラル、脱炭素社会の実現を目指すことを表明したことに関し「我が国は成長戦略としてカーボンニュートラルに挑戦し、地球温暖化という危機を、イノベーションを通じたビジネスチャンスの拡大により乗り越えていくことを目指す」として「高い目標、ビジョンを掲げた上で産学官を中心とした日本総力で取り組み、RITEの技術開発の取り組みへの期待を語った。また、経産省がカーボンニュートラルに必要な水素、蓄電池、洋上風力、カーボンリサイクルなど各分野について具体的な目標電源やターゲット、規制や標準化などの制度整備、社会実装を進めるための支援策を盛り込んだ実行計画を20年中を目途に取りまとめることに言及した。

シンポジウムでは招待講演として経産省の矢作友良大臣官房審議官（環境問題担当）が気候変動に関わる国内外の政策等を解説し、山地憲治RITE副理事長・研究所長は基調講演で「省エネ、電化、電源の脱炭素化、水素化を進めても、化石燃料を使わない姿は現実的ではなく、CO₂を回収・貯留するネガティブ